第一滝本館でチツクインし、各部屋に通される。和室を三部屋用意してくれた、それには皆大騒ぎ、取敢えず風呂だ、浴衣を小脇に女性陣は出て行った。ケンジは聞いた。

「次郎さん、あの場では谷川警部の手前、OK出せなかったんでしょ」

「ケンジ、小生を見抜いたか叶わんな」

「次郎さん、何年付き合っていると思ってるんだ、そくらい分るよ。俺からもお願いする、早い時期いや夕飯時にでもOKだし、即歓迎会だ」

「ケンジ分かった、小生等も温泉入りに行こう」

広い温泉、他に入浴客は入るが女性三人、貸し切りだと大はしやぎ、誰とはなしに品定めが始まった。

「ヒマちゃん大きいね、自分はがっかり」

「謙遜しないでよマキさんなんか、凹凸がはつきりし大きいし、女の自分でさえ惚れ惚れしちゃう、カナさん、この際だから聞いていいね」

「えっ、ヒマちゃん何」

「えーと何と言うか、影の所まで日焼けしているんだね」

「ばれちゃった、夏は八丈島へ最終便で行って、プライベートとビーチで目いっぱい焼いて、翌々日の朝便で帰って来ます。夏以外はバリ通いです」

「ケーキ屋は自分が留守の時は、後輩の新庄彩花さんが確りと、ケーキを作くり留守番してくれています」

「食べたいしケーキいいな」

「でもヒマちゃん、東京は深大寺の、コーヒーショップいっぷくでは、ケーキ付のコーヒーが飲めるよ、しかも無料だね、あっこんなこと言っちゃうと次

郎に叱られるかな」

カナの口は滑らかに回転している。

「ヒマちゃんも真っ黒になりたいなら、指導しますよ」

三人の品定め大会は完了、夕食は何かたと広間に、次郎がこっちだと手招きしている、並んだ小皿の多さに、マキ達は歓声を上げている。あそこの席に焼酎と梅干に、お湯は魔法瓶でお願い。マキは、傍に居た仲居さんに手際よく頼んだ。マキは焼酎に、梅干入りのお湯割りを作った。

「カンパイね、自分でいいよね、皆コップ持った」

今宵はマキが指導権をとった様だ、高らかにカンパイ、周りの人達は華々しく始まったカンパイに、元気のいい娘さん達だと其々言っているようだ。

次郎とケンジはそれとなく頭を下げた。次郎が皆を見言った。

「酔いが回らん内に言っておこう、室蘭署内では谷川警部もあり、言えなかったが、日葵はチームいっぷくに入って頂く、器量よしはマキとカナに負けないし、英語と接客は、申し分なく日常生活に溶け込んでいる。接客は小生の不足を補ってくれるだろう。外国語はカナとダブルが問題ない、あるとすれば武術だ、でも直ぐさま習い、上達することはない。自分等と行動していれば、自ずとして付いてくる。PCと言うかは、コンピューターはプロ中のプロと聞く、PCも最近は必要不可欠、そっちの方から協力してくれ、武術は機会ある毎に練習すればいい。じゃーこれからはヒマちゃんで行こう、マキにカナにヒマだ。体調を考慮したっぷり飲んでくれ」 「だから次郎好きよ」

マキが言いカナにヒマは同調した。

思い出したように次郎は言いだした。

「明日は函館止まり、よって出立は10時でいいだろう、函館南署により片岡警部補と山崎巡査長に会い、捜査状況の交換と、今後の見通し及び、銃殺者は何処から来て何処へ消えたか、現場を見て推理も必要だろう。ヒマ、そんな時は十津川警部さんに聞いてはどうか、次郎は頭を掻いた、またまた余計な事を、喋ってしまったなゴメン、小生はケンジと飲んでいる、皆は心置きなく飲んでくれ」

次郎はそれっきり三人には話はせんだった。

翌朝、次郎達が食堂へ行くと

「おはようございます」

と威勢のいい挨拶が聞こえて来た。マキにカナにヒマだ、ゆんべは旨い酒をたっぷり飲んで、快適な目覚めの様だな。次郎もケンジもおはようと返した。

「朝風呂入った、自分等は入ったよ、あのでっかい風呂、今朝は誰もいない、正に貸し切りでした。まだ時間はあるから後でまた入ります」

「時間さへ守ってくれば何回でも」

そう言って、朝食を終えた次郎達は部屋へ戻った。誰が並たかホテル前に、真っ黒なBMWのサイドカーと、モスグリーンのミニが並んで停車している。車好きな観光客だろう、二人三人と集まって来た。腕組みをし眺めたり撮影したり、差し詰め、BMWとミニの撮影会の様だ。その光景を見ていた次郎は困り顔、想定外だ早くどいてくれないものか、今マキ達が
出て行けば大騒ぎ間違いなし、どうしたもんかと、と同じして、

「次郎お待ち同様、先に行って待っているね」

「人の気も分ならず仕舞いな三人」

ううーつと発し、次郎は両手で顔を覆った。今日の三人、どことなく化粧が濃いように見える、しかも肌はたっぷり出したいっぷく仕様、どうなる事やらと想うもつかの間、外でYY始まってしまった。

はい、腰に手を当てて、後ろを向いて等々、その度にシャッター音が鳴り響く、コンデジを含め10人のカメラマンで大騒ぎ。何時しか一般客や通行人も加わり、人だかりは山と化す、ホテルマンも出て言った。

「きてここは公道です、往来の妨害になります。ただちに解散して下さい」と、ホテルマンは必死で解散を促している、次郎も観て見ぬ振りも出来ません。「自分達は公務でこの地に来ています、支障をきたします、女性三人を解放し解散して下さい」

次郎とケンジも必至だ。誰が通報したか登別温泉交番から、警官が二名来て収拾に務める。警察官が次郎に言う。

「我々が群集の注意を引きます。その隙に乗車し走り去って下さい」

次郎は指で丸した。カナいいか警官が隙を作ってくれる、その隙にBMWに一人で乗り、下に走り去ってくれカナ分かったな」

カナはメット越しに了解する。

「今で行けー」

つま先でミッション操作し走り出した。サアー今度はこっちだ、

「直ぐ動かせるようケンジ頼むぞ」

「要約運転席へ、そしてよっしゃー」

警察官がマキとヒナを人を描き分け、後部座席に乗車させた。二人の警官

と次郎はミニの通路作り、お巡りさんが、

「今だと叫んだ」

ケンジはミニを走らせ次郎は助手席ドアにつかまりながら、乗車に成功。次郎とケンジは顔を見合わせフツと息を吐いた。

「すごかったね、あのカメラの数と人だから」

とマキとヒマが言っていた。次郎はケンジを見、この野郎供と目くばせをした。ケンジは、まーいいじゃないですかとばかりにコックリ二つ。ルパンが喚いたカナからだ。

「自分等も脱出できた、今何処だ登別東インターには行っていないだろ」

「はい、まだそこまでは行っていない」

「洞爺湖登別線の何処か広い所があったら、そこで待っててくれ、すぐ行く」

カナは了解と言って電話を切った。次郎はスマホをプッシュした。谷端ですがと言い谷川警部をお願いしますと言った。

「次郎さんどうした」

と言う。

「登別温泉で騒ぎを起こしてしまう、その反省の弁で電話を入れた」

「次郎さんご心配なく、あのお三方なら、カメラマンが放っておかんよ、今日は一段とお美しく見えた」と登別の察官が言っていた。その警察官は昨日、獲物を狙い仕留めた、クロヒョウさんをしかと見ていた、二警察官です。手助け出来て光栄ですと言った。この先何があるかも知れん、まー、取敢えずお気をつけて」

「ありがとうございます」

そーこーしとったら前方にBMWが見えて来た。互いやーとばかりに手を振った。ゴタゴタ後チームいっぷくはここで、全員集合。次郎とマキが言った。

「ヒマちゃん、パツセンジャーシートに座りたいと言っている。次郎いいですよ」

「いいけどマキはどうするんだい」

「ミニを運転する、いいでしょう」

「この先何が起きるか分からん、そこを頭にぶち込んでくれ、そんで何が起きても冷静で運転できるように」

「はーい」

「それとヒマ、連絡は密にとる事、こつちからも連絡は今迄同様にする。何か質問は」

「休憩はどうする」

「函館南署へ一気に行けるが、無理する事はない、どこかで休憩とっても構わん、昼は函館駅近くで、ヤリイカの活き造りといこう。以上だサーー行こう」

高速道を乗り継いだ、交通事情は最適、昼前に函館に到着、お目当ての店は、駅前スペースの右十字路先にあった。仲居さんがこちらへどうぞと奥へ、ヤリイカが泳ぎ回る脇を通る、二つのテーブルをくっ付けてくれた。コップを5個持ってた。

「ご注文は」

の声にとマキが代表ですと言った。

「ヤリイカの活き造り定食を5つ、お願いします」

仲居さんは畏まりましたと言い、さがった、マキは座り直した。代わりに板さんが出てくる、両手に手ごろな大きさのタモを、二つ持って登場、又もやマキが出て行く。

「おじさん、そのタモをどうするの」

「おっお嬢ちゃんどうするか見てて」

お嬢ちゃんの言葉に皆、戸惑い顔、ケンジはウツつと発してしまった。

「誰今笑ったの、板さんがお嬢ちゃんと言ったからでしょ」

「お嬢ちゃん、言われたけりゃー言わしとけば、それよりこっちへお出で、二つのタモはこうやって使うんだよ、一つだと逃げ回ってしまうし、傷も着き易い、二つで前後を抑えれば追い回す事もない。それだけ新鮮で且つ、生きの良い魚をお客様に、提供できるって言うもん。お嬢ちゃんお分かりかな、バックヤードで拵えてくるから待ってて」

と言って板さんは消えた。

「マキ、板さんは良い情報でも提供してくれたかや」

次郎が聞いた。

「魚はよく一つのタモで追い回してしまう、結局は逃げられる羽目に、一つのタモで逃げ道を塞ぎ、二つ目ですくう、最初はコツもあるが、そんなに難しい物でない」

と言っていた。皆フーンだって、そーこーしていたら、お嬢ちゃんお待ちどうと、活き造りヤリイカが現れる。要約皆もお嬢ちゃんに慣れたようだ、ヤリ

イカが現れてからは、

「お嬢ちゃん」

と出ても誰もむせることはない。

「このヤリイカ、自分をずうっと見ている、でも美味しいから食べてと言っているようだ」

カナは言った。

「この店は理紗と出会った店だ、女子大生グループと夕食がてら飲んでいたら、理紗と菊田健斗さんが入って来た」

「じゃーこの店の人、次郎を知っているんじゃない」

久し振りにマキのジャン言葉が出た。

「無理だな、さつきも真正面で話したんだが分からなかった、無理もない、あんときゃー髭は伸び放題、頭も伸び放題のぼっさぼさだった。このヤリイカ甘いねーと言っていると、

「新鮮ならはです

と板さんが皆の脇に来て言った。

「作業していたら、髭もじゃの声が聞こえた、あー、あん時の髭もじゃおじさんだと気づいた。結局はあのご主人は、お亡くなりになったようですね、酷いことをするもんですね、私は必ず警察が捕まえてくれると思っている、元髭もじゃさんはどう思います」

「必ず逮捕です、それ以外にありません」

「元髭もじゃさん、いいこと言うね、あっしは函館で、ヤリイカの活き造りの料理人やが、元を正せば江戸っ子だい、三鷹の生まれや、どうだい、髭も

じゃさん参ったかい、今日は綺麗なお嬢さん持参で結構やな、焼酎サービスんで、飲んで行ってくれ」

「板さんは嬉しきは隠せんが、これから大事な仕事待っている。お気持ちだけで充分です」

今宵は函館泊まりなんでしょ、夕食に来てくれ、たらふく飲んで、たらふく食って行ってくれ。いくら皆さんが食べ、飲んだってこの店は潰れやしねー、ほれ、さっきのお嬢さん、飲みたい食べたいと言っている、他のお嬢さん方もその気の様だ」

板さんにあっちゃー叶わんな、今日は夜遅くなると想われる、明日の夕食にお邪魔させて頂く、場合によっちゃー、一人増えるかも、どうでしょう」

「何人だって了解、待っているよ、これは店の電話番号だ、時間がわかれば電話入れてくれ」

思わぬ招きに、マキを始め女性陣から歓声が上がった。函館南署に次郎一行はついた、いつもなが次郎達を見ると、すんなりは行かない、杖突棒警官はすかさず通せんぼする。

「こらお前らは何者だ、そこは駐車禁止だ、出て行ってくれ」

次郎は頭を掻きながら言う。

「小生は東京の谷端次郎です。片岡警部補さんと、山崎巡查長さんにコンタクトは取っております。連絡して下さい。それと何処に停めたらいいでしょうか」

と次郎は低調に言った。その言に杖突棒警官は落ち着いたのか、

「あそこのパトカー先なら停車可能」

と言った。杖突棒警官は、マキ等の容姿が気になるんだろう。何時までも目で追っている。玄関奥の方から、ヤアーと手をあげ、片岡警部補が出て来た。次郎さん、彼女等が噂のいっぷくガールズですね」

「いっぷくガールズとは分からんが、兎角小生に協力してくれる面々です。まー、跳ねっ返りと言うか、言う事聞かんで、夏はまだ先だと言うの、これが今どきのファッションです、と申すありさま、うら若き乙女の服装は、肌は出しちゃーならぬとか、法律は出来んもんかな、片岡警部補さん」

「そんな法律作ってみろ、自分は日本脱出だ」

マキが声を大にして言った。

「立ち話もなんだ、応接間に行こう」

警部補は先を歩きだした。すれ違う署員は、パクったのかと言った表情をし、振り返る。ソファアーに、次郎とケンジが並んで腰を落とした。マキ達もソファアーに座った。片岡警部補と、山崎巡査長は次郎の前に座る。

「情報交換と言うか、遠い所からお越し下さって、ありがとうございます。」

これと言って新しい情報はない、今迄の情報を見ながら進めましょう」

「では私から」

と警部補がトツプをとった。

「三月二十七日、菊田健斗は青柳町の住吉漁港で射殺された。それまで奥さんを交えて、駅前の割烹で飲んでいた、そこに次郎さんもいた。九時過ぎに電話で漁港に呼び出される、健斗さんは奥さんに、業務上重要な話あると言い、出向いた。翌朝射殺された健斗さんを発見、それは至近距離からだと聞く。砂に記されていたダイニングメッセージは、函館南署の鑑識による

と、次郎さんの指摘通りカタカナで（ヒシヨ）ではないかと断定した。次郎が手を挙げた。

「仮に秘書だとしたら、健斗さんは東都地検の秘書課勤務、一市民が手出しはし難いと想い、なおざり気味でした。今は伝手を使って外堀を崩し始めた。そこまでは来ているんだが」

「地検とコンタクトが取れる、さすが次郎さんだ、俺がそんな事やらかしたら、即、上部からクレームを入れられる」

「皆さんには、家庭を守る大事な仕事がある、現役の頃の小生と同様に、動けとは言わん、それは皆さんが決めるのであった、小生にはどうする事も出らん。話を本題に戻そう、至近距離からの射殺と秘書の文字、この二つから始まっている、小生はそう睨んでいる。いわば顔見知りの犯行ではないからだ」

「今や成人男性の殆どと言っても過言でない、携帯電話は皆持っているが、健斗さんが持っているべき携帯電話と、手帖が見つからない、犯人が犯行を隠す意味で、破棄したのではないか、そこに、俺は引っかかっているんだ」

「確かに変だな、所持してるのが普通と想う」

警部補の言に次郎はそう言った。

「では何の為に破棄したか、犯行は身近な人の可能性では」と次郎は言い追加す。警部補が言い出した。

「次郎さんは、健斗さん電話が入った時、割烹にいたんですよね」

「いました、大学生が飲みや飲みやの大騒ぎ中だったな、呼び鈴は聞こえて

いたが、賑やかなので、テーブルを少し離れたので、話の内容までは分からんが動揺したが、取り留めの無い様な事はない。理紗に行ってくる、先に休んでと、ごく普通だった」

と次郎は言い切る。

「では犯人像は、十津川警部、警部ならどうと見ている」

次郎の振り方にヒマはドツキりする。

「健斗さんと理沙さんの会話からすると、顔見知りの犯行と想える、しかも傍で普通に話が出来る人物、そうになると、ダイニングメッセージにも登場した、秘書課員では無かろうか、仮定で申し訳ない」

警部補が言い出す。

「十津川警部とは俺は知らない、何方ですか」

「おー、ゴメン言っってなかったな、言っってなかったと言うより、紹介してなかったな祖父は、東京で交通課勤務の稲垣巡查長、その姪っ子さんで名は稲垣日葵、通称ヒマです。これが大の推理小説ファン、十津川警部の助手になったつもりで、事件を追って、夜行列車に乗りたりしている。そんで、十津川警部と呼ぶ時もある。それが一週間前から自分達と、行動を共にしている。又、ヒマはのみ込みが早い、警部補見てくれ、幾日も経たんのに、皆と同じ肌だしルックを、マスターしてしまった」

「次郎さんだから、お嬢さん方は仕事をし、リラックスし楽しんでいる。そんな風に思うんだが」

「そうです、次郎さんがいなければ、今の自分達は居ません」

マキとカナが警部補を見言った。

「で、警部補話を戻そう」

と次郎は言う。

「ヒマが言ってたように地検、秘書課員濃厚だと想う。しかしやたらと、手が付けられないのが現状だ。警部補さんも分かって下さい。自分等は警察手帳も拳銃も持てない、捜査官です。しかし小生等は真実追及にあります、相手が大きければ大きい程燃えます。確信が取れるまでは、捜査調査し続けま

す、途中で悟られ証拠隠滅されては、何も残らん、釧路署にも了解は取っている。小生等抜きで動く事はご遠慮願いたい」

「次郎さん、ご心配なく、ここでは手に負えぬ事ばかり、捜査はするが最後の詰めは、次郎さんに頼むしかない」

「ありがとう、理解してくれて、それと警部補さん机上の理論は、いろいろあろうが、犯人は何処から来て何処へ行ったかだ」

「署でも調べたんだが、これと言って確信が取れないでいる。次郎さん達にも見てもらうが、防犯カメラにもヒットせず、犯行現場付近に、カメラは設置されていない、夜の漁港はシーンと静まり返っているだけ、無論通行人の目撃者はいない。そんな訳で射殺事件ではあるが、捜査縮小もやむを得なかった」

「この漁港は夜間、船の出入りはどうですか」

「荒天時、小型漁船は避難港に利用してる。それ以外、時たま出入りはあるが静寂その者です」

「時たまと言うのは、地元漁船以外の船でしょうか」

次郎が警部補に聞いた。

「日中は係留許可を、とって管理しているが、夜間に時たま出入りする、漁船の管理は、利用者の信頼を以て管理するだけ、従い夜間の出入り漁船は不明です」

「自分が夜間漁船で来て、数時間停泊は可能ですか」

「無論可能です次郎さん、犯人は漁船を使い犯行に及んだと」

「仮定で申し訳ないが、そう思うのだが」

「漁船で来て犯行し漁船で帰った、そうだとすると次郎さん、それは無理だ、健斗さんの携帯電話は見つかっていないが、電話局で発着信を調べた。犯行時刻の少し前に、函館駅の周辺の公衆電話から、健斗さんの携帯へ発信された記録が残っていた、従い犯人と思しき人物は、漁船からでなく、函館駅から住吉漁港へ向かったと想われる」

片岡警部補の説明を次郎は、頭を上下にしながら聞いている。

「次郎さん私の推理はどうだろう」

「正解だな、犯人は漁港から漁船で出て行った、これは正解だと想う。問題は誰が、函館からどの様に漁港に来たかだ」

片岡警部補と次郎の応酬は続く。お茶にしましよと婦警さんが、コーヒーと茶菓子を運んできた。個々にコーヒーを置き最後の一つは私のですと言い、女性陣の傍に置き座った。

「私は一昨年、生活安全課に配属になった、乃木文乃です宜しくお願ひします」

將軍さんのお孫さんの様なお名前ですね、こちらこそ宜しくとマキが言い、

「右からカナにヒマです、そこの大きな男はシンジです」

と紹介した。

「屈沙羅湖と登別温泉の武勇伝、又今朝は登別で大撮影会もあったようで、その辺の話を聞きたいと、仲間が言っています。今休憩に入っています、食堂の方へ来て頂きませんか、皆が待っています」

「次郎、行っていいでしょう」

「構わんが羽目、外さん様に」

「昼間っからアルコールは飲みません、よって羽目は外れません。行ってきますーす」

「片岡警部補さん、いつもあの調子だ」

次郎は頭を掻き苦笑い。

「でもあのお嬢さん方は、チームいっぷくには無くてはならない人材では、次郎さんだって助かっているんでは」

「そうなんだけど」

「サアー次郎さん次に行こうか、健斗さんは函館駅から、タクシーに乗ったとして、犯人はどう様に行ったのだろうか、市電と言う手もあるが」

「市電だとしたら、車掌さんが気づくんでは」

「その辺も調べてみた、その時間帯の終点谷地頭駅の乗降客は疎らで、谷地頭温泉への入浴者だけだった。話を聞き、入りに来た観光客だ、車掌の話では軽装で、明らかに旅行者風と言っていた、が中にはカジュアルな恰好をしていたが、香水を利かせた女性もいた」

と警部補は言う。

「香水を利かせた女性は気になるが、犯罪者らしき人物はいなかったか、例

えぼだが警部補、夜間、人っ子一人いない住吉漁港に漁船が出入りしたとす。その時、近隣の方は如何致す」

「別にどうって事はない、疲れ休憩に来た位しか思わん、また夜間は雨戸も締まり、家の中にいるならば、エンジン音等は聞こえない」

と警部補は言った。

「夜間は漁船が出入りしても気づん、てーとこだな」

「次郎さんその通り、だけど何故に出入りに拘るんだい、それに香水を利かせた女性に」

「又もや、推理と言うか例え話というか、こんなのはどうだろう、こんな仮説を立ててみた聞いてくれ、健斗さん銃撃者は新幹線で函館へ来た、駅前の公衆電話から、業務上大切な事があると言い、住吉漁港に来てほしいと電話を入れた。知り合いからの電話だ、疑いもなくタクシーを飛ばした。電話主と会った、こんな遠くでこんな遅い時間に何が起きたのか、とか言いながら挨拶を交わした。相手はすぐさま拳銃でズドン、倒れるも必死で、ダイニングメツセージを残した。拳銃は足が着き易い、直ぐ漁港に破棄した、同じして手帖もだ。それで用意しておいた漁船で、釧路に向け出向する。射殺者は男とも女とも、今は判明していない。ただ小生の直感だが、女性ではと想像する」

「それは何故に」

と警部補は言った。

「香水だ、駅員が言っている、温泉客の中に、香水をつけたお客さんがいました。人其々だが、入浴間近な人が、香水をつけ直して来るだろうか。それ

と香水でもう一つ気になる事がある。釧路でのこと、空港で毒殺に関与したと、一人の香水女性が浮上している、昨今、香水を利用する女性も多いと想うが、彼女も利用していた。彼女が住吉漁港で健斗さんを射殺し、手配しておいた漁船に乗船し釧路にわたり、薬物バイヤー、東京小金井市の大里麻衣を毒殺、同じく漁船主、八戸市の土田一太郎も毒殺と関連が付く。飛躍した話だがどうだろう、片岡警部補さん」

「次郎さんそうなれば、東都地検秘書課の不正、噂されている議員への闇献金、麻薬取引等々が出てくるのでは」

「しかし、確証と言うか物的証拠が見つからない、函館南署も片岡警部補さんの一声で、住吉漁港の底を攫って下さらぬか、ピストルが沈んでいる筈だ。それに健斗さんの手帖も出てくる、小生はそう信じている」

「実際、署員が俺の一声で動くかな、そうだ且つての名警部が言っていた。銃殺事件の真相は住吉漁港の底にあり、底を攫うべしと元谷端次郎警部が、言っていたと報告しておきます」

次郎はあアツと声を発し頭を掻いた。

「地検絡みで小型とは言え、漁船が借りられるだろうか、貸出人もおいそれとは貸さんだろう。よっぽどの利益が伴わなければ、漁師の命とも言える漁船は貸さない」

「次郎さん、地検絡みでは無理があるようだが」

と警部補が言った。

「ならばこんな仮説はどうだろう。釧路空港で吸い殻やごみ、紙から地検、秘書課の女性が浮かんでいる」

「ええー次郎さん、そこ迄掴んでいるのか」

と警部補は言う。

「指紋、唾液から女性が浮かんだが、これも確証が取れていない。そこで小生流に推理してみた、聞いてくれ、その女性は、八戸漁港で漁船持ちの人を探した。日程は後ほど言い渡しますが、前日の夜、函館から翌朝までに釧路へ、私を運んでくれないか、報酬は、釧路の着くまでの私の体と、百万でどう。着いたらボーナスとして後百万、いい話でしょう。実際の所は不明だ仮説を続けよう、翌朝、釧路幣舞橋の船溜まりへ、僅かとなった時、漁船オーナーは、あんたはシャワー使ったんだろ、俺はたんべの汗がこびり付いている。汗を流して来ると言い階下に降りた、漁船は自動操縦になっていると、シャワールームから大声でオーナーが言う。その間に毒瓶から液体を、七分程になった魔王に注ぎ、幣舞橋の船溜まりに着くと女は、オーナーの携帯電話を、気づかれん様海中へドボンし、小さめなりユックと着替えだろう、大中の紙袋を抱え、残りの百万を渡し下船した。それは恰も旅行スタイルと言ったところ。まだあるがここままで質問は」「度々出てくる女とは誰の事かえ、ひよつとしたら、秘書課長の村井瑠璃子では」

「ひよつとしなくても、その人だ」

「次郎さんは偉い所を突っついてるんだな、相違があつたら如何致すんだい」

「相違はない、その為に北海道まで来て調べている。警部補さん理解してくれ」

「現役の頃の次郎さんが出てきたようだ、上層部が何と言おうが次郎流、了

解しました」

「続きを聞かせてもらいます」

「幣舞橋袂の公園で、東京小金井市の大里麻衣と出会う、彼女は薬物バイヤーの一人だ。組織の中で彼女は公安にマークされている、何とかせにゃーならん、と組織の中で噂が立っていた。彼女は以前から、仲のいい友達と北海道を旅するのが夢だった。それが今回でしていた」

「仲のいい友とは」

「警部補は察しがついているであろう、その女だ」

「車で摩周湖から屈沙羅湖、阿寒湖を回って釧路空港に」

小生等の聞き込みでは、彼女等は阿寒湖で昼食をとった。その時片方の女は帽子を深く被り、手は薄手の手袋をしていたと、食事をする時も手袋はしたままだと、店では言っていた。カメラは持っていたが、手袋女性は写ろうとはしない、もっぱら片方の女性だけでした。この辺も何かがある、そう思っている。食事が終わりお茶を飲んでいたが、釧路市内が混むと列車に、間に合わんといけない。そう言って、手袋女が支払って出て行った。店で言うのには大きな紙袋を、釧路市内で収集車を見かけたので、お願いしますと言いパツカー車へ放り込んだ、あと一つはこれからの着替えが入っていると言っていた。そんな時は良く着替えする人だなと想っていた。ここいらは取材の通りの説明」

「手袋は取らんし、食事と言うのに大きな帽子も取らん、変だね次郎さん」

「まったく以ってその通り、変だよ、その後釧路飛行場に向かった」

ここで女性らが戻って来た。

「次郎、そんなにくっついて警部補さんと、密談してたの自分等に内緒で」

「そうじゃーないよ、釧路からここまでを説明していたんだ」

「マキちゃんやカナちゃんの武勇伝もたっぷりでした」

警部補は優しく言った。

「それより婦警さんに、函館の見所と食事処を聞いていたんでは」

「明日はヤリイカの活き造りだなーと言いつつ、函館駅の東に若松町がある、

そこの寿司処が旨いと言っていた。今日の夕飯はそこにしようよ」

そう言われちゃうと、次郎はダメと言えんちで、

「相分かった、だけど今晚は大事な仕事が控えている、アルコールは抜き」

「はーい、畏まりました」

と女性陣の返事がする。

「今晚の予定だがと次郎が言い出した。二十七日午後九時三十五分の殺害時に、加害者と健斗さんは住吉漁港に居た。健斗さんはタクシーで向かった、一方加害者だが、駅前から電話を健斗さんにかけている、したがって船で住吉漁港へは来られない。タクシーの乗車は、函館南署の聞き込みで確認は取れていないし、足が着き易いので利用していない、ならばだ、市電を使った。そう思う」

「でも次郎さん終点の谷地頭駅では、降りたのは温泉客だけだったと、車掌が言っている」

「警部補さん小生は、そこが気になっている」

「と言うと次郎さん、何でしょう」

「車掌さんは言っていた、乗降客の中に香水を利かした女性がいたと」

「香水の香りはさせた女性なら、いっぱいいると思うが」

「いると思う、しかし釧路空港で小生等の捜査線上に浮かんだ女性がいた。その女性も香水を匂わしている、この二人の女性は同一人物ではなからうか」

「さすが天下にその名を轟かせた次郎さん、良い推理かもしれん」

「仮定の仮定だが、小生は些細な事でも突っついて行く、そんな性分です」

「イヤー次郎さんすまん、で今宵はどっから突っついて行く」

「警部補、やだなー小生は突っつくなんて」

「次郎さん、そうじゃーない、捜査方針と次郎さんの推理を、聞きたかっただけ」

「そうだよ次郎、警部補さんは聞きたかったただけだよ、自分等も聞きたい、早く教えて」

マキとカナがヒマも、揃えたように言う。

「では、小生流に推理して見よう。加害者は函館駅で市電に乗り、終点の谷地頭駅へ向かった。住吉漁港へはひとつ前の、青柳駅で降りるのがベストだが、函館南署の調べで、銃殺事件時の乗降客はいない、ならば終点の谷地頭駅だ。駅員の言うのには、皆温泉利用者だったと言ったが、温泉に入る所までは確認していないと言った。要は一人二人は入浴者ではなく、一般客の可能性もだ。その中の一人が例の女で、遠回りながらも住吉漁港へ行ったのでは、青柳駅で降りれば漁港は近いが、足が付き易い。かような訳で青柳駅を避け、谷地頭駅で降りた。そこから徒歩で住吉漁港へ向かった。そこで健斗さんを待つ、健斗さんは9時30分頃漁港に着いた。

やあーとか近づき、遅く迄ご苦労様ですとかと、加害者と想われる女に、一言二言声を掛けた。と同時に健斗さんは、消音拳銃で撃ち抜かれた」

「次郎さんは何故に、消音拳銃でと想う」

「無論、他に気づかれん様にです。他に何かあるかな」

次郎の説明に警部補は了解と言った表情だ。

「続きを話そう。銃殺された健斗さんは、薄れゆく記憶の中で必死に、ダイニングメツセージを砂に残した。一方、加害者の男か女は、いやこっからは女と称させて頂く。女が手配したんだろう、八戸所属の漁船が静かに入って来た。女は拳銃と健斗さんの所持品を、海に捨て漁船に跳び移つ漁船は静かに出て行く」

「次郎さん、ここで言う漁船とは何時ぞや、釧路港の岸壁に激突炎上した、八戸漁港の第二山葉丸」

「その通りです。しかし山葉丸のオーナー、土田太郎と女、女とは村井瑠璃子を指す、以後は女とは村井瑠璃子で行く、これにはリスクもあるが、小生流で行く、女と土田太郎との接点は、何処にあったのか、接点があって、女は住吉漁港で山葉丸に乗船した。村井瑠璃子と土田太郎は、同年としか分かっていない。又小生の仮説を喋らせてくれ」

はい、どうぞと一同は次郎に向いた。

「瑠璃子は、土田太郎に函館から釧路へ、漁船で運んでくれと依頼した、土田太郎は陸路の方が安全で、確実性であると思つたと思う、尚且つは漁船を選んだ。女性の頼みとは言え土田太郎は、沿岸とは言え長丁場は危険も伴うと言える、大海原を往復する気はなかったと思う。そこで女は奥の手

を使った、瑠璃子の仕事は超一流、テキパキと終わらせ、決して残業はしない。数字は計算機要らず、そんな彼女にも弱みがある、酒と男にはだらしない、言う人も地検職員もいるようだ、所帯を持った時もあったが、三年で終わった。その後とんとん拍子で出世し、秘書室長に上り詰めた。ところが、淋しさも手伝ってか週末は、決まって高級クラブで高級酒三昧、男漁りも始まった。そんな話を耳にした小生は網を張った。掛かった、そのままお決まりのコース」

「で、次郎はどうしたの、そのまま行っただの」

「瑠璃子の酒と男の現状が確認とれた、よって偽り電話でその場を離れた。

そんな時も人一倍香水を放っていた」

「そのまま、お決まりコースへ進めば良かったのに」

マキが疑惑の眼差しで、次郎を睨んだ。

「真実を求めた行動の一環だ」

次郎はマキに言い放った。

「お二人さん、その辺にして次へ進んで下さい」

警部が言った。

「おおゴメン」

と次郎は言い続きを話始めた。

「そんな瑠璃子と土田太郎は、場所は不明ながら出会った。どう土田太郎さん、貴方の漁船に乗せてよ、何も聞かないで函館から釧路まで乗せて、自動操縦セットしとけばいい、揺れる船内ながら、私はあなたの者ですよ、釧路に着いたら、ボーナスと称し百万出しますよ、悪い話ではないでしょう」

「十津川警部の推理小説に、良く出てくるような一節だね」と、ヒマが言う。

「次郎の仮説、ヒマちゃんも喜んでいるよ、続きは」カナまでもが次郎にチャチャを入れ始めた。

「今ん所はここ迄、後は八戸に渡ってからだ。警部補、無念ながら七戸に伝手が無い、函館南署から八戸署に、三月に函館市住吉漁港で起きた、銃殺事件と関連が出て来た、釧路港で激突炎上した、八戸漁港の第二山葉丸船主、土田太郎の経歴等をFAXされたしと、連絡をとって下さい。それから、住吉漁港内の底攫いをやって見てくんないか、ピストルと健斗さんの所持品が出て来る筈だ」

「了解、八戸署には至急連絡とってみる、底攫いは近日中に実行す」警部補の気合の入った、返事が返って来た。

「で、今宵は何時に何処で」

「出来るだけ時間を合わせよう、函館駅九時ではどうだろう」

「良いでしょう、俺と山崎巡査長と乃木文乃巡査で行く、そのまま市電に乗り谷地頭駅へ向かう。途中駅の乗降客をしてみる、それで射殺現場へ向かう。次郎さんどうだろう」

「了解と言い、ホテルの次郎達の部屋に集まった、コーヒタイムと称しヒマが、缶コーヒを買って来る。次郎は言う。

「シャワーを浴び着替えは皆の自由、7時30分に若松町の寿司処へ集合、時間までは自由行動だ」

ヒマはマキとカナにひそひそ話する。

「ヒマちゃん決まりだ、それで行こう」

其々Vを作る。

「又、俺はのけ者だ」

とケンジは次郎に言った。

「小生にも分からん、何か言いアイデアでも見つかったんだろう、そっとしておこらや」

と次郎は言いコーヒーを空にした。次郎達が寿司処に入ったら、既にお茶だけだがYYやっている。

「次郎、先に入っちゃったよ、注文しちゃったよ、板さんが東京から来た客人だ、サービスするって言ったんで、お任せメニューで2貫サービスだって、良いでしょう」

次郎はうんうんし乍らカウンターに座った。板さんが言い出す。

「客人、あそこの楕円テーブルが空きました、あちらへどうぞ」

「はい、行きます」

と言ってマキは移動し始めた。何か魂胆があるっんだろう、次郎はそう思っていたら、ヒマが段ボール箱を出した。マキとカナは薄笑いを浮かべている、次郎は何だろうと、ヒマの仕草を見つめている。ジャーンと言って取り出したのは、モバイルファックスだ、しかもキーボードもあり、プリンター機能も搭載している。見た所A紙と同じくらいの大きさ、最新バージョンとヒマは言った」

「次郎、チームいっぷには必需品です、今迄無かったのが不思議なくらい、操作はヒマちゃんがばっちりです。良いでしょ買って」

「そんなこと言ったって、もう購入したんだろ」

女三人、口揃えてはい。

「想像はつく値段は聞かん、上手く活用し大事に使ってくれ」

「おい、母ちゃん俺は決めたんや、今宵は、とびっきりのサービスすんや、起こらんといてな」

「綺麗なお姉さん見ると直ぐそれや、その為とは言えんが、ブラックオパールの指輪、買ってやるって言うたかて、今だ無しの礫や、父ちゃん、買ってやるって言ったのは、四十年も前の事や」

「買わねーとは言ってねー、今月はサービスし過ぎや、次月はきつとやでー」

すし店の大将と女将さんだろう、握りながら言っていた。

「来る月も来る月も、いつもそれや、今月は期待していたんだが、無理やな、綺麗なお嬢さんが三人さんお越しでは、サービス奮発は決まりや」

「何グジャグジャ言ってるや、巻物早く頼むで」

大将と女将さんの話は、次郎達のテーブルと近いし筒抜けだ。皆の表情は複雑、次郎は皆に聴いた。

「あの夫婦の会話どう思う」

ケンジは言った。

「決して、口から出まかせに言っているのではない、寿司職人は、とかく気の風が言い、気分が乗ればサービスだって多々や、綺麗なお嬢さん三人来たとして、中々言えるもんやない。厨房でのあの大将は本心やで、嘘偽りない」

思いもよらぬケンジの言葉に、皆は頷いた。女将さんがお待ち同様と、桶

を持ってきた。

「父ちゃんが値段は据え置き、ネタは上で握った」

と言った。大将がこれはサービス品や、残さず食ってくれとヤリイカの活き造り5皿置いて行った。

「大将、ご馳走になります。サアー皆ご馳走になろう」

と次郎は言っけてヤリイカに手を付けた。チームいっぷくに合流した、モバイルFAXが、マキがセットしたのか、リズムのいい、ダンスミュージックが、スピーカーホーンが流れた。釧路警察の大滝警部からだ。

「警部さん、自分ですマキです」

と応対す。次郎は苦虫顔になったが、ホーンを取り上げた。

「次郎です、何か釧路の方で進展でも」

「はい、ありました。でも次郎さんそのヤリイカ、美味しそうだね」

次郎は、あれっとした表情で言った。

「ヤリイカが見えるんですか」

「はい、バッチリ写っています、それと桶ん中のネタは上等品に見えます」

「次回はと言うと立ち枯れてしまう。でも大滝警部、次回会う時には上等の、魚貝類の店で」

「次郎さん先に礼を言っちゃうよ、ありがとうございます」

「で本題は」

次郎は問した。

「次郎さんの狙った通り、幣舞橋の船溜まりを攫ったら、出てきました。八戸漁港第二山葉丸の船主、土田太郎の携帯電話と、鍵が数個纏ったキーホ

ルダーに免許証が出て来た。それと今は片付いているが、炎上した第二山葉丸、水面上はなく、木の浮力で辛うじて浮いていた。鑑識の話では、操舵席脇のスチール机が、熱でグニャグニャだがスチール製なので、辛うじて机と確認できた。引き出しの中は、これも熱で黒焦げが多い。鑑識が気になったのは、熱で黒くはなっているが、原型を留めていた小瓶だ。何と次郎さん、その中身は空状態だったが、調べた結果、釧路空港駐車場で、毒殺事件の折、使用された毒薬と同種だった。

次郎さんどう思う、空港での毒殺事件は、第二山葉丸炎上事件の後だ」「同種の毒薬だとすると、入った容器は二つあった。或いは別箇なのか、小生は前者をとるが」

「俺も次郎さんに同感だ、底攫いし出た品を、基本に沿って調べてみる。何か出たら連絡します」

そんな次郎達と、釧路署の大滝警部とのやり取りを、目の当たりにした店主夫婦は、キョトンとし見つめていたが、

「あなた方は一体どなた様ですか」と聞いて来た。

無理もない、警部に向かってマキです、なんて気軽に応対するし、次郎には毒殺事件の、捜査状況を報告している。

「普通じゃーないよな、それとなく小生等を説明しては」とケンジは次郎に言った。

「ケンジ、説明頼むよ」

振られたケンジはご主人に話し始めた。

「こちらに次郎さんは元三鷹署の警部、真実究明と、市民の安全に勤めていた名警部、退職されたがその腕を買われ、他県の警察署より事件ごとの相談も多い。刑事だましが抜けず、よく相談もされる一方、犯罪者の更生にも力を入れていた。俺も次郎さんにご厄介になった一人、体格を買われた、元、柔道のオリンピッククチャンピオン。今はチームいっぷくの一員になった。こうして真実究明と、市民の安全に勤めている」

自分もとカナが言い出した。

「警視庁特殊隊の一員ではあったが、親を人質に取られ悪事に加担してしまう、そんな時次郎さんが、更生への道筋を作ってくれた。今ではこうして次郎さんの言う、真実究明と、市民の安全へ進む事が出来ました」「カナ、P Rは終わりか、ならば俺が付けたそう。柔道と空手は有段者、語学は英語は勿論仏蘭西語、独語は堪能、ライフルはオリンピックク選手と同等、国際犯罪の屈強な男でも負けやしない」

店主夫婦はケンジの話に、ただ頷くのみだった。

「それと隣りにいるマキちゃんは、瀬戸内は、村上水軍の末柄、祖父村上太郎さんは、水軍の跳びを主とした技を、取り入れた北野流の主謀者です。そこで幼い頃より稽古に励み今日です。カナちゃんと同じして、そんな所そこいらの男どもには、負けん。最後になってしまったがヒマちゃんは、我々に加わって日が浅い。武術は今一やが、スマホを始め、モバイル機器の扱いは類を見ない。現在は行動は共にするが、リスクを考慮し後方支援、ご主人以上だが他に質問は」

「イヤハヤそんな凄い人達とはつゆ知らず、ご無礼があったかと思うがご勘

弁、腕によりをかけて握った品々です、心行くまでご賞味して下さい。それとーお願いが」

「板さんなんでしょう」

とケンジが聞いた。

「一緒に写真取れさせて下さい、皆さんのサインも」

ケンジより早く、マキとカナがが返事する。

「はい、いいですよどんなポーズでもいい」

と返した。次郎は又かと言った表情で、中トロを頬ばる。次郎はマキを寄せ、板さんには聞こえん様に言った。

「マキいいか、この分だとヤリイカ代と、割り増し料は取らんだろう。おあいその時、このポチ袋を渡してくれ、一万円入れて置いた、足りんがブラックオパール、購入資金の一部にしてと、渡してくれ」

マキはVサインす。函館駅東口の奥まった所に、片岡警部補と山崎巡查長、乃木文乃巡査の三人が待っていた。次郎達はヤーっと言って合流。

「片岡警部補がどいう風にしよう」

と聞いて来た。次郎は

「三つに分かれよう」

と言う。谷地頭駅行きの市電で、青柳駅降車と、終点の谷地頭駅降車の市電二組、後はミニとBMWはケンジとカナで頼む、道筋の混雑等確認し漁港に、青柳降車組は、そのまま漁港の調査、谷地頭駅組は、市電を他の乗客と一緒に降り、谷地頭温泉へ向かう。途中気づかれん様に入浴者らと別れ、漁港に向かいながら、人通りの有無と出会った場合、その人の状態等を

観察。以上だが他に何かあるかな」

「振り分けはどの様に」

警部補が言った。

「片岡警部補と山崎巡查長は終点から漁港へ、乃木文乃巡查とヒマに小生の三人は、青柳駅で降り漁港に行く、漁船の出入り、騒音、人の動き等を調べる。タッチを交わし皆其々に散った。市電の函館駅二十一時十一分発の、谷地頭行きに乗った。十分で青柳駅に着く、警部補に手をあげ次郎達は降りた。時間のせいかな静かだ、駅員さんのありがとうございましたが響く、駅前だと言うのに人がいない。5分もしない内に漁港に着いた、カナとケンジが、やや離れた所で手を挙げている。既にBMWとミニが着いていた。夜間もあって漁港の大きさは分かんない、だだっ広ろさ勘頼りだ、中央から左は漁船用のスロープになっている、右端は長い岸壁となり、程々の大きさの船なら停泊可能だ。

「駅からの道も、人に会わんは雨戸も締まっている、この静けさは、漁船が出入りしたって分からんだろう、銃殺者には好都合だったに違いない」次郎は皆に言った。

「銃殺現場は」

と次郎が言い歩き始めた時、片岡警部補と山崎巡查長が、やって来た。

「次郎さんそれはこっちだ」

と案内を始める。

「その岸壁の外側に防波堤が作られている。防波堤外の砂利と、砂地が接した部分に、健斗さんは倒れていた。運よくと言うか何と言うか、砂地部分

に倒れた故、ダイニングメッセージが残せた。次郎が徐に言い出した。「健斗さんと女は、ヤアと声を発し近づいた、途端に拳銃でズドン、それは消音付きかも知れん。至近距離で撃たれた健斗さんは、何故にどうしてとか言い倒れた」

「次郎さんらしい推理ですな、で、その後は」

と次郎を見た。

ヒナが買って来たよ、飲もうよと岸壁にコーヒを並べた。

「あれ、自販機あった」

と乃木巡査が言う。

「駅を降りここへの途中、交差する道路の奥に、自販機らしき朱色箱が見えた。さつき次郎の目を盗んで買って来た」

「さすがー、十津川警部のいや、次郎さん助手さん、見事です、何故か喉が渴いていた所だ」

と警部補は言った。一息ついた所で、誰とはなしに次郎に聴いた。

「この先の推理はどうなる、聴かせて、奇抜な推理は」

「それセクハラだと、言われんかも知れんが聞いてくれ、女は男に公衆電話で迎えを頼んだ。漁船が静かに着岸す、女はありがとうと言い、差し伸べた手を引いてもらう、女は乗船完了し、漁船は静かに岸壁を離れ、港外へ、女は男に百万円渡し、残金は約束通り無事に釧路に着いてから」

「分かったよ、もう一つの約束は」

「慌てないで、外海に出て航海に安全と見たら、自動操縦に切り替えて、時間はずつぷりあるんだから」

「因みにこれから向かう潮首岬は、大間埼との距離は17、5 kmで、本州とは最近地だよ知ってる」

「そんなの私にやーどうでもいい事、私の体が欲しいんでしょ、航行が少なく早く安全な海を目指しなさいよ」

「後二十分位だろ楽しみにしている」

女が指導権を握っていた、皆はこれからの成り行きを注目している。女は三年の結婚生活はあるとは言え、夜の営みは並外れている。男も自信に満ちていたが、手こずり気味の様だ。が、男も然る者、推し気味に事は運び始めた。女は快感を過ぎ、喘ぎ声に変わって来た。反り替わり、のたうち廻り、やがて男は果てた。釧路の船溜まり迄後半時の頃、男は女を起こした。

「たんべは汗びっしょだったよ、汗流してきな、後で俺もシャワー浴びる、湯は足りると思うが大事に使ってくれ」

「えーっ、二回も私を」

「そうだ二回も良かったぞ、早く浴びて来いよ着いちまうぞ」

「これは割引対象もんだな、いくらにしようかな」

そんな操舵室とシャワー室の会話は弾んだ。来ないと思うが、俺がシャワー浴びている間に、他船舶が近づいたら来たら怒鳴ってくれ、直ぐ操舵室に上がって来る」

女は男がシャワーを浴びている間に、カジュアルウエアに着替え、今迄着用していた衣服を紙袋に終う。男の免許書とスマホを、女のバックにしまった。そのバックから小さな瓶を取り出す、中味を飲みかけの魔王の瓶に、数滴流し込んだ。突如して、

「あーさっぱりした」

と男が上がって来る。

「あら早いじゃーないの」

と女が聞いた。

「汗だけ流せばいいだけだ、時間はかからんよ」

女は悟られん様に、空になった液体の瓶を、操舵室脇にあるスチールディスクの、引き出しに隠した。八時ごろ幣舞橋脇の船溜まりに、漁船は着いた。

女が降りると、漁船は直ぐ離岸する。女が言う。

「魔王置いといた、八戸に帰ったら任務完了と祝い、ゆっくり飲んでね」

「じゃー又来月」

と男は言い、船溜まりから漁船は湾へ出て行った。男は待ちきれず、湾内で毒物入りの魔王を飲み、操舵不能に陥り岸壁に激突し炎上した。

「以上だが何か質問は」

と次郎は皆を一週した。警部補が手を挙げた。

「女性の皆さん、次郎さんの推理に、閉口も暫し、酷に聞こえた事も数多と想う、しかし我々警察官は、老若男女を問わずもつと耳を塞ぎ、眼を覆う状況に遭遇する。そのことから、次郎さんの推理は職務上当然の事、次郎さんを、白い目で見るのは止めてくれ、それよりも、推理に出てきた男女は誰なのか、暫定でもいいから教えてくれない」

下を向いていた、マキにカナにヒマは言った。

「それは誰なの」

次郎は躊躇するも喋り出した。

「まだ確信は取れていないが話そう、女は住吉漁港での銃殺者、釧路空港駐
車場の毒殺者及び、釧路湾、第二山葉丸の船主の土田太郎毒殺者でもある、
東都地検秘書課長の村井瑠璃子だ、男は毒殺された土田太郎で相違ない」
皆はどうしたもんかと思案顔、次郎は再び喋り出した。

「今宵ここに来て小生は、既に外堀は埋まっている、内堀もこれで三分二は
埋まった」

と次郎は言う、女三人の大將格のマキが言った。

「残りの三分の一は何処なの、何時埋まるの、

「それは八戸にあり」

「やっぱし八戸によるんだね、何か閃いた」

「当初言っていた様に寄るよ、最後の詰めに必要なのは八戸だ。土田太郎と
村井瑠璃子は同年代で八戸出身、何かあるとみている。双方とも父親は亡
くなっているが母親は健在、観光客相手に干物販売を営んでいる。親御さん
に会い、聴きたい確認した等々、直接ぶつけてみる」

最初は先程の次郎の推理に白目であった女性陣、話が進むにつれ身を乗り
出してきた。時間は十時半過ぎ、

「次郎さん、今宵はこの辺でいいかな、吉報を待つと共に、我々も情報を掴
んだら即、ファックスします。今そこに迎えに来たと、連絡があった」

双方軽くタッチし別れた。

「小生等も解散するか、朝食は各自でとってくれ、支払いは小生のカードで、
マキ頼んだぞ」

よっしゃーとマキは答えた。

「昼食は函館駅前の例の割烹料理屋へ、大将が、何を出してくれるか楽しみだ。ご馳走になり函館港から、津軽海峡フェリー十六時発の、大間行きに乗り船しその日は、大間泊まり」

「キャットホー、又もやマグロ尽くしだ」

女性陣は魚貝尽くしの旅行と言うか、今回の様な調査は何回でもいい、今度はいつ行くの」

それには次郎は、返す言葉が見つからない。

素朴な民宿だ、海沿いの瓦屋根の平屋づくり。部屋は畳で障子で区切つてある。日葵は且つてこの様な部屋に、宿泊経験がないと見え戸惑う。

「ヒマちゃん大丈夫よ障子で、区切つてあるからスッポンポンでも見えないよ、自分等がいるから安心して」

マキはヒマを気遣っている。夕食が始まる。次郎の心配がジワリ出て来る、女将さんと息子さんと、切り盛りしているようだ。ご主人がいるようだが厨房から出て来ない。その分、女将さんと息子さんが賄さん顔負け、以前から接客は優マークがつく、おまけに身の上話が始まる。

「本場もんのマグロが食べたいが為に、大間に旅行に来た。そんな時会ったのが、厨房にいる主人、翌日このまま大間にいてくれないか、と説得されたが、都会育ちの私には、ここの生活は無理ですと、お断りしました。暫くすると私の体に異変が、早い話が子供が出来ました」

主人に言いました。

「子どもの為、親子一緒に暮らすのが一番、何も要らん着の身着のまま来ればいい、待っているぞ、都会が恋しくなったら旅行すればいい、そんなこんな

でその子もこんなに大きくなりなした」

拍手が起こる。女将は嬉しき、恥ずかしき隠されず、食卓を作りながら言
った。

「あなた方は、一体どういった方々ですか」

と訪ねて来た、カナが今まで通り説明した。

「スタイルよろしく、綺麗なお嬢さん方です、てつきりモデルさんかタレント
さんではないかと、想っております。主人は厨房で魚介類と相まみえ、静
かにしているが内心は、座敷に出て皆とYYやりたいと、想っています。そ
して私どもはてつきり、マグロと漁船達とかの撮影で、いらっしたんではと
思った次第」

いつもの様にマキが言い出した。

「スツポンポンは困るけど、それ以外ならいくらでも撮っても構いませんよ」

その場に立ちポーズをとった。珍しく次郎は聞こえん様独り言を言う。

「普段だって裸同然なのに今更スツポンポンはダメとは」

「次郎、今何か言った」

「いいえ何も申してはおりません」

皆は下を向き笑いを堪えた。厨房で料理を作っていた主人、ひと段落し客間
に出て来た。

「あらお父さん如何したの、どっか具合い悪いの」

と女将さんは氣遣った。

「いやーそのー」

と纏りないご主人、女将さんはポーンと膝を叩いた。

「父ちゃん全く、そーならそーと言えばいいんだ」

皆は何の事だか、成り行きを見守った。

「お嬢ちゃん方、父ちゃんはなー、はち切れそうなピチピチギヤルが傍に居る。それ故、興奮気味や、尚且つ父ちゃんはチョーが付く程、恥ずかしがり屋、私との初夜も明とるいとダメと言って、真っ暗闇で挑んで来ました、私もその頃は若かった。皆さん方を見、その頃を思い出したようです。カラオケで良く当時の歌を熱唱しています。父ちゃんもこうして客間に出る事はなかった。が、お巡りさんよりも、偉い様なお嬢さん方と出会い語らう。興奮せざるを得なかったようです、カラオケはサービスいたします。時間の許す限りお楽しみ下さい」

と、女将の言に又もや拍手が起きる。二時間経った、次郎はいつもの様に「小生の時間は終わった、明日は寝坊すんな」

と皆に言い寢床にへ行く。翌朝、次郎は朝散から戻った。皆は其々に、おはようございますと、次郎に声を掛ける。

「次郎さん、おはようございます」

と女将さんの声がした。

「おはようございます」

と返した。

「お連れのお嬢さん方器量も良いが、酒も強えーなー、じよっぱりの一升瓶を2本空かしちまつただよ」

「料金は支払いします」

「次郎さん、そうじゃーない、女性3人2升飲んだ事になる、それだけ飲ん

だお客様は、初めてだと言いたかっただけなんや」

「ほー、そんなに飲んだのか、でも女将さん珍しい事ではない。こないだも、喜多里の四合瓶を半ダース飲んでしまったよ」

「酒飲む女性は知っているが、こんな横綱級は初めてです」

そうこうしていたら「漁師飯出来た」

とご主人が声を掛けた。マグロの漬けに、ワカメと豆腐と油揚げの味噌汁にサザエのつぼ焼きときゅうりとなすのぬか漬け、これが我が家の漁師飯です。ご飯はいっぱい炊いた、お変わりして下さい。それと次郎さん、昨夜は片付け物を手伝ってくれた、お礼と言っちゃーなんだが、先程住所を聞いた。小振りだが、今朝上がったクロマグロを、深大寺に送った皆で食べて下さい」

「ありがとうございます」とマキが返事した。

「さばきは自分が行います」

と言い握り拳を作った。

「出刃が一本ある、これをもって行って下さい。刃渡りは1尺はある、この位あると裁くのが楽です」

マキがりがとうございます」

と言い受け取った。

次郎さん達は先程、調べ事でこの地に来たと言っていたが、話せる範囲で構わんが話してはくれまいか」

ご主人の問いに次郎は喋り出した。

「八戸漁港第二山葉丸の船主、土田太郎と八戸市出身の村井瑠璃子に付い

て調べに来た。ご主人ご存じならば教えて欲しい」

「村井瑠璃子なる女子は分らんが、土田太郎は分かる。父親の弦蔵さんは、立派な漁師だった。一昨年嵐の日、転落しそのまま帰らぬ人となってしまった。太郎の為に船を新造した矢先だ、魚探等備えた最新型だったが、籠が溜れた太郎は、酒と競馬に明け暮れ始めた。女にも目がないようで、夜の八戸で見かけるようになった。生計は専ら、漁港で干物を作り売りをしている、年老いた母親のさだ子さん任せ、とても漁船のローンなど払えはしない」

「地元故同級生も多いと想うが」

「立派な漁師の倅だ、信用はあるし、付き合いは多かったようだ」

「何方か同級生はご存じないでしょうか」

「わしはこうして家で、宿泊者のお世話をしている、家から出んよ、倅や女将は買い出しに行くから、外の話が聴けるかもや、今女将を呼んでくる」

「太郎ちゃんね、頑張り屋さんだったが、弦蔵さんが亡くなってからは、大半の人が、第二山葉丸が出て行ったのを、見た事がないと言っている。酒と競馬に暮れているようだ、最近は女もだ。何でも最近、八戸高校の同窓会があった、二十数年振りに会う人が多かった、と言っていた。中でもアイドル的存在の女子が、出席したとそれは大騒ぎの様でした。そのアイドルさんを仕留めたとそれ又大騒ぎ、小さな町だ噂は直ぐに広まった。アイドルさんは既婚者かは不明だがその日は太郎ちゃんと消えたと、その後二人は、どうなったかは分かんない」

「その後の二人を知っている人はいない」

女将はうーと言い、

「そうだ次郎さん思い出した、何時だか干物を買った時、さだ子さんが言っていた、これからは毎月、マグロを上げた位を稼げるぞ、これからは楽させると豪語していたと、言っていた。さだ子さんは話は誰でもできる、現物を見せろと言っただけでいいよ」と

じつと聞いていた次郎は口を開いた。

「その後その話はどうなった、アイドルと太郎はどうなった」

と言いながら次郎は、村井瑠璃子のファックス画を女将に見せた、ご主人にも見てもらう。

「私等は、昔の面影が薄らとしているだけで、現在の彼女は分からない。この画像は皆さんと同じように、容姿端麗欠点無く、モデルさんかタレントさんの様だ。この画像が村井瑠璃子さんかは分からない」

次郎は腕組みをし、うーんと発す。

「女将さん、ここまで来てしまった話そう、釧路港の岸壁に激突炎上した、第二山葉丸も調べている、無論その時焼死した土田太郎さんもだ。小生等は少数だが真実究明に、この地にやって来た。あなた方の情報を待っている、何時でも連絡して下さい」

「あなた方はどでかい人達ですね、警察顔負けです。あっ思い出しました、登別温泉での武勇伝は、並みいる男どもを一撃で撃退したと、大間新報に載っていました。又、村井瑠璃子と土田太郎、彼らの情報なんだが、八戸高校へ行けば分かるのでは、それと土田太郎の母親が、漁港で干物を売りしている、さだ子さんを探せば良いと思う」

「ありがとうございます。サアー皆八戸へ向けて出立するか」

と次郎が言うと、女将家族が集合した。交互に写真を撮り捲った。色紙にサインをし、軽快なエキゾースト音を残し大間を後にす。八戸漁港で、さだ子おばーちゃんを探すのは難しくなかった。道路脇に、テント張りが続いた所があった、平日なのか客らしき人はいない。その一角に、さだ子おばあちゃんの店はあった。次郎は週刊平成の名刺を出した。

「息子さんの事件を調べています。お話を伺えないでしょうか」
期待しない返事を待った

が差に非ず。

「東京からですか、よー来てくれましたね、お昼に家へ帰る所です。お茶でも出します一緒に来て下さい」

と言い、さつさと歩き出した。

数回曲り角を曲がった先に、いかにも漁師らしき造りの家が、見えて来た。

「ここです、今縁側開けます待ってください」

家の中に消え雨戸を開く音がした。

「東京の人こっちです」

と声がする、さだ子さんは座布団を持って来、お座り下さいと言う。

「そこに椅子があります、こっちへ運んで座って」

さだ子おばーちゃんは、お客さんを使うのは、慣れ親しんでいるとみえ、次郎達を上手に使う。

「ほれ、魔法瓶とコーヒーと牛乳に佐藤はここです、その綺麗なお嬢さん方、淹れてくはなはれ」

マキ達も上手に使われた。コーヒーが全員に行き渡った所で、息子の話だ

ねと、さだ子さんは座り直し言った。

「どんな事、何をお話すればいいかな」

「太郎さんの最近と同級生、村井瑠璃子との関係を」

と次郎は聞いた。

「父さんが死んでからは、籬が壊れた様に、酒と競馬に女で明け暮れていた。とても干物売っただけでは追い付かない、父ちゃんの拵えた貯金を、崩していくしかなかった。そんなある日、母ちゃんマグロが釣れそうだ、来月からは楽させてやんぞと言った。でまかせよう言うな、期待せず待っていると聞いた、そんで岸壁にドカンやで、楽するどころかローンを残しただけや、今は父ちゃんの貯金と、干物を売って何とか生活してんがな」「息子さんが無くなつたと言うのに、おばーちゃんは元気ですね」

「そりゃあ、亡くなったと聞いた時はショックで、起きれなかったが、廻りの手助けで早い時期に、いつもの私を取り戻したよ」

と言いはっはっつと笑った。

「こんちゅわー、外で声がする。」

「待ったよ、そのまま左に回り縁側に、お願いします」

ザルそばを肩にした若衆が、縁側に降ろした。

「ザルは後で回収に来ます、表へ出しといて下さい」

と若衆は言って下がった。

「サアー家には何もねー、あるのはザルそばだけや、食べて行ってくれ」と、おばーちゃんは言った。

「お茶を入れてくる」

と言い、奥に消えた。次郎達はキョトンとするも、

「折角だ頂こう」

と次郎は皆に言いツルツルし始めた。おばーちゃんは魔法ビンと急須、湯呑を持って来て、私も食べよつとツルツルと始めた。

「食べながらで構わんよ、何でも聞いて下さい」

「ここでの、おばーちゃんの趣味や楽しみ事は」

と、カナがツルツルさせながら聞いた。

「さすが東京の人だね、良くツルツルさせながら、話が出るね」

カナは一瞬褒められた様にとったが、直ぐすみませんでしたと言った。

「いやー構わんよ、親しみがあつていいよ、ここじゃー皆そうだよ。そうさな、楽しみ事はこーしーで大勢で、YYやりながらお茶を飲んだり、食事する事かな、カラオケもあるかな。ここんところと言えば、家の石潰しの事が多いかな」

カナが聞いた。

「そんな時はおばーちゃんはどうかさいました」「慣れもあるし、それより私を、温かい目で見てくれているよ、私を取り巻く人達は、私の宝です。これからも皆でYY騒ぎ、楽しくやって行きます」

次郎が聞き始めた。

「さすがおばーちゃんだね、見習わなきゃ遺憾なー、所でおばーちゃん、太郎さんの部屋を見せて頂けんか」

「あいよ、食べ終わったら見せるよ」

好物とは言え、魚介尽くしの食事故、一同ザルそばにホツとしたようだ。

「世間の親御さんは、不慮の死を被ったお子さんの部屋等は、そのまま保存すると聞いている。が、太郎の部屋を片づける気であったが、布団は隅っこに積んであり、申し訳程度の本立てに、ちゃぶ台だけ、片づけようがなかった、よってそのままになっています」

「ここ、八畳間が太郎の部屋でした。聞いた通りがらーんとしている、ちゃぶ台の上に、ライターと灰皿が置いてあり、他に週刊誌が数冊置いてある。部屋の隅に布団の他に、折り畳んだ段ボール箱と、漁業関係の書類や、小荷物の発着書類が重ねてあった。次郎はそれらを一枚ずつ、目を通す様に女性達に指示した。次郎はちゃぶ台上に置いてある、写真建てに目が釘付けになった。

百人程の男女の中に、他の女性達とはかけ離れた服装で、背は高く垢抜けた女性が写っていた。紛れもないあの、村井瑠璃子だ。次郎は

「この女性です、村井瑠璃子です」

とさだ子さんに指さした。

「あーこの女性ね、太郎が釧路へ行く前日来てたよ、何でも送付した荷物を、取りに来たとか言っていた。自分の実家があるんだから、そっちに送ればいいのにと、そんな時は思った。未だその意味は分かんない、その時の送り状がその書類の中にある、探せばわかる分かんと思う」

マキとカナが一枚ずつ確認する、あったとカナの声、東京港区からだ、送り主は大野江かおりと記してある、受取人の住所はここだが本人と記されている。その送り状をカナは次郎に渡す。

「さだ子さん、この人に記憶は」

と聴いた。

「其の荷物を、村井瑠璃子と名乗る女性が引き取った。太郎は、その荷物とその女性を軽トラに乗せ出て行った。太郎はそれっきり帰ってはこない、返って来たのは激突死した連絡だけ、石潰しとは言え、たった一人の肉親、わたしやー目の前が真っ暗になってしまう。そんな時、浜にいる商売仲間が寄り添い、励ましてくれた。今のわたしやー、こーしていただけるのも、浜の皆様のお陰だよ、東京から、お見えになった次郎さんとやら、わたしやー心配いらんよ、だが石潰し否太郎が如何にして、激突死したか真実が知りたい、真実は如何にかと究明して下さい」

次郎達は誰とはなしに頷いた。

「村井瑠璃子の母親は健在と、聴いている。八戸高校へ行けば居所は、分かると思うよ行ってみたら」

次郎は立ち上がりおそばのお礼を言い、数々の情報をありがとうございます。警察は出来なくても、小生等が真実を究明して見せます。吉報を待って下さい」

「こっから県立八戸高校へは3km位だ」

次郎はスマホをプッシュした。

「東京の週刊平成の谷端と言います。卒業生の土田太郎さんについて、調べています。お手すきの時間にお会いし、お話を聴かせて頂きたいと思ひます。ところで今日は、これからご都合は如何でしょうか」

「教頭の島永です、谷端さんお待ちしています。先程、土田君の親御さんから、電話がありました。息子さんの死について調べている。知っている事を

話してやって下さい、と親御さんが言って来た。お待ちしています。聞く所によると、素晴らしいサイドカーとミニで、来るような事を言っていた。それにタレントさんと、モデルさんの様なお嬢様が3人、同伴されていると聞いた、生徒が動揺すると遺憾なので、裏口に用務員さんの出入り口がある、車はその脇に停め、用務員さんの扉から校内に入って下さい、用務員さんには伝えておきます」

極力静かに車を動かしたが、聞こえてしまった様だ、用務員さんが、こつちへどうぞと手招きをしていた。

「話に聴いていたが、賑やかな車ですね、それに今風ねお嬢さん方」

用務員さんの第一声だった。

「ここから校内に入り、廊下を左に進んだ先が校長室です。教頭の島永がそこでお待ちしています」

用務員さんに連れられ校長室前に来た。

「お連れしました」

とドア越しに声を掛けの中に入った。

「教頭の島永です」

と、銘々に名刺を配った。次郎も出した、それを見たマキとカナも、週刊平成の名刺を出した。

「校長が出張で留守していますが、確り対応するように言われております。又、校長はこの春に赴任したゆえ、何かと見えない部分もあるうか、そんな事を言い、教頭さん宜しく頼むと言っていた。尚、私は土田生徒の担任でした、七年前に、教頭としてここに戻ってきました。十数年のブランクはある

が対応できます、もし不明箇所があれば、その年代の先生を呼び対応します」

教頭さんがそこ迄話すと、女性の用務員さんがコーヒーを運んできた。

「まずはコーヒーを一口して、話を進めましょう」

「頂きます」と、皆はカップを手にした。

「で、何から始めましょう」

と教頭さんは皆を見た。

「高校時代の土田太郎と村井瑠璃子についてお聞きしたい」

島永教頭は当時を思い出すが如く目を細め話出した。

「土田君は高校生からガタイが良く、良く力自慢をしていた。だけど喧嘩したと聞いた事が無かった、むしろ仲裁役をしていた。大勢いる中、気に入らんとするものはいたようだが、定かでない。成績はまずまず、私は進学を進めたんだが、俺は漁師になる漁師が好きで、親父の後を継ぐんだ。その一点張り、私は惜しいと思ったが引き下がった」

「卒業してからはどうでした」

「時化てる以外は親父さんと一緒に、船を出していた。あれは何時だったかな、私が教頭職で、ここに戻った年だったかな、親父さんが後継ぎ太郎の為に、漁船を新造した。八戸市の名立たる人達を呼び、盛大に進水式が執り行われた。私も恩師と呼ばれた。親父さんの気質もあるが、幾つもの大漁旗を上げ、お囃子が奏でる。目を見張るものでした」

「土田君の漁師の腕は如何でしたか」

「親父さんに言わせれば、なっちょらんと言っていたが、八戸漁港では、ト

ツプクラスと言う人も居ったようです」

「近年は酒と競馬と女に、明け暮れていたと聴いているが」

と次郎は聞いた。

「言われても仕方ない、事実です」

「何でそうなってしまったんでしょうか」

「父親の死でしょう、親子ではなく師匠として接していた。何でも相談し何でも手ほどきを受けていた、それがプツツリ無くなった。これからを考えると動揺もあつた様だ。又、父親の死と、接点があるかは分からんが、同じして、青森市内の娘さんとの結婚が、破談になってしまった。父親の死を境に人が変わってしまった。搔い摘んで話した、話しそこないもあると思うが質問は」

と教頭さんは言った。徐に次郎が喋り出した。

「漁にも行かず、遊びほうつけ遊んでいる土田太郎だ、親御さんは何も言わなかったのだろうか」 「最初は言っていたらしい、だけど分かったと空返事ばかり、さだ子さんは、日々の生活費だけでもと、干物の生産販売を始めた。ローンはまだあつたが、弦蔵さんが残してくれた、貯蓄で賄っていた。

教頭は、でも次郎さんと言ひ、同窓会であつた時の事を、話し出した。母親には迷惑かけてしまったが、これからは楽にさせてあげる、幸運と言うべきかいい仕事が見つかった、近々、漁船も処分する予定だ、ローンは無くなるし、当然月々の返済もなくなる。そんな事を言っていた」

「それで村井瑠璃子は」

と、次郎は聞いた。

「ご両親は市内の建設会社に、職人と事務職で勤めていた。仕事も生活も順調、瑠璃子が高三の秋に、父親が病死してしまった。悲しみに暮れる瑠璃子だったが、頑張り東京の大学が受かった。とここ迄は良かったのだが、母親が再婚した。がその男はチョウが付くほどのぐうたら亭主、上さんが仕事を持っているのに漬け込んで仕事せずに、酒と女に明け暮れいる。でも母親は、そんなぐうたら亭主でも許していた。瑠璃子はそんな母親を許せなかった、卒業すると東京に出て行った。その後何一つとして、瑠璃子の情報は入ってこなかった。不幸と言うかべきか否か、ぐうたら亭主がその年病死してしまった。母親は建設業者が引き取ってくれたが、娘の情報は完全に途絶えた」

少し間が空いて次郎が言う。

「今でも親御さんはその建設会社にいるのかな」

「います。だけど誰にも会わんと言っている、先日同窓会があり、村井瑠璃子さんが出席ですと伝え、会ってみたらと言いに行っただが、どこ吹く風、フーンと言った表情だけでした。会社では当らず触らずだそうです」「会ってみようと思っっているんだが」

無駄だ何も聞けんが、行くだけ行ってみたら、直接ではなく会社を通せば良いかも」

親御さんの話はその辺で、今度は村井瑠璃子さんの話が聞きたいと教頭に言った。

「ご存じだと思うが、高校時代の村井瑠璃子は、そちらの三人さんと同様に、容姿端麗、背は高くタレントさんかモデルさんの様でした。日々男どもは騒

ぎ、授業にならん時もあつた。村井瑠璃子の同級生で誰かいたんかな、デートした男が、わしゃー聞いた事が無い。結構みんなちよっかい出していたが、デートまでは行かなかつたと思う。同窓会に出席すると、返事が返ってくる、役員さんを始め皆大騒ぎ、急遽出席すると連絡があつた様だ」

「結局、同窓会はどうなりました」

次郎は訪ねた。

「噂によるとお開きになり、土田太郎と村井瑠璃子は、肩を並べて会場を後にしたそうです。同級生を制したのは、土田太郎でした」

「その後、二人を見た人はいないですね」

「そう言う事になりますね」

只今と校長先生が戻られた。

「校長の久米川です」

と、大きめなディスクの椅子に腰かけた。次郎達も順に自己紹介する。

「教頭からあらましは聞いている、真実究明し土田太郎さんの無念を晴らしてやって下さい。先程、校門を入つた中程で、数人の陸上部員に引き留められた。校長先生の部屋に、スラットしたタレントさんの様な、モデルさんの様な、三人の女性が入つたと言っていた、本当ですか、もし本当であれば俺達も会ってみたい、校長先生何とかならんもんですかと言う。こちらの女性さん達では」

「校長先生その、ではさん達です」

教頭さんも砕けた方で、そんな言い方をした。

「教頭さん、授業は終わり、掃除や部活の時間に入った。後は下校だけだ、

どうだろう教頭さん、皆を体育館に集めて、タレントさんの様な、モデルさんの様な三人さんとトークタイムでもやったら、明日からの、モチベーションアップに繋がるのでは」

マキ等は成り行きを見守った。

「次郎さん、校長先生がああ仰っている、協力して頂けませんか」

「はい、分かりました、教頭先生、女性陣とよく打合せして、ケガの無いように事故の無いようにお願いします。その間にケンジと二人、瑠璃子さんの親後さんに会い、聞ければお話を聞こうと想っている」

では、校長先生、教頭先生後は宜しくお願いします」

「やったー、野球部員も、ここの全生徒さんも、ボーナスとも言える学校の計らい、大喜んでいる筈です。」

「次郎さんとやら、ありがとうございます」

コーヒーのお代わりを運んで来た用務員さん、嬉しさ余り、お盆をひっくり返そうになった。

「マキにカナとヒマ、CDは持って来てんだろ、あれをかけ、歌い、トークしダンス。朝稽古の様子をやればいい、サイン会モドキも入れれば一時間なんてあつという間だ。頑張ってくれ」

握り拳を作り、三人はオッスと言い気合を入れた。次郎とケンジは、教頭さんに聞いた住所を頼りに、村井瑠璃子の母親を訪ねた。その建設会社は、学校から十五分程の大通りに面したところにあった。こじんまりとしているが、一応は受付があった。

「東京の谷端次郎です」

と名刺を出し言った。受付嬢は言う。

「東京からですか」

とやや、怪訝そうな表情をした。

「はい、村井瑠璃子さんについて調べています。村井瑠璃子さんの親御さんに、お会いしたいのですが、自分の隣は同僚の田川健次郎です」

と次郎は言った。受付嬢はプツシユしながらも、

「お会い出来ないかもと言う、今迄、誰が訪ねてきても、いわゆる門前払いです。先日も刑事さんが来ても、会いたくないの一点張り。結局お巡りさんは何も言わず、聞かずに帰って行った。そんな事もありました、一応連絡入れてみるね、待ってて」

次郎とケンジは期待せず待った。思わぬ展開に、二人は顔を見合わせた。

「会いますって言っています、食堂の方へどうぞ、そこを真っすぐ進み、突き辺りの手前、右が食堂です、どうぞ」

と受付さんは言った。

「ありがとう」

と礼を述べ次郎とケンジは、今では珍しい、裸電球が灯る廊下を進んだ。

ドアを開け中に、パイプ椅子と机が並ぶ。奥に親御さんらしき女性が、

「こちらへどうぞ」

と手招きし言った。

「私は瑠璃子の母親、村井加奈子です。今迄誰にも会わなかった私が、何故会う気になったか、気にならない」

「なりますね、際触りがなければ教えてください」

次郎は言った。

「じゃー話そうかな、谷端次郎の名は、瑠璃子から聞いていた」

「と、言う事は瑠璃子さんと連絡を取っていた」

「そうです、家出当初は、裏切りとも言える母の行動に、不審だらけでした。東都地検に勤め始めた頃でした。名刑事、谷端次郎の名を聴くようになった。そんなこんなで瑠璃子も、谷端次郎の名を気になるようになりました。受付さんが谷端次郎と言っていたので、会う気になりました。話を瑠璃子と私にもどすね。年に数回程度、娘から電話があった、別にどうでもいいような電話ばかり、私の声が聞きたかった、だけと言っていた。その頃だったか、ぐうたら亭主が、亡くなったと聞いたのは、女、一人とは言え生活がある、返さなくてもいいと想いながら、送金をした。差に非ず、瑠璃子はありがとう、と返事が来た、それからは毎月、送金するようになりました。所で刑事さんみたいな、刑事さんじゃーないお方様、ご用件は何でございましょう」

思わぬ展開と言うか、母親の気質は聞いた話とは正反対、明るく発展的で宴会屋さんの様だ、と次郎とケンジは顔を、見合わせた。

次郎は思い切った訪ねた。

「村井加奈子さん、娘さんについて分かる範囲でいいから、お話し出来ませんか」

次郎の問いに考えるような仕草をし話し出した。

「地検に入って3年後だったかな、お母さん私、結婚しましたと電話で話していました。そりゃー、おめでとうさんと声を掛けました。その時はありがとうと言った。だけど刑事さんでない刑事さん、三年で離婚しっちゃったん

だ」

「加奈子さん、大変だから次郎でいいですよ、次郎で」
と言った。

「じゃー次郎さんで行くね、相手は税関職員だったが、違法まがいで通過、させていたようです。主人のそこへも、良く分かんない書類や人達が来ていました。娘が正すと即離婚でした、訳の分からん団体から、圧力がかかったと言っていた。そんなところ、やめちえへと言ってやった。そうしたら秘書室勤務の辞令が出たと言った、そんで今は秘書室長だ。私から言うのもなんだが、娘は出来た、機転も聞くし信頼もあった。地検のトップとの連携は抜群でした。誰よりも処理は早かった、東都地検総長も安泰でした。私の知っているのは、そんなところですが」

「娘さんから何か、預かったものはないかな」

「同窓会の前日、娘が帰って来た、お母さんこれ預かったってと、茶封筒を仏壇の脇に置いた。いざとなったら、私にとっての重要書類です。大切に保管しといてと言っていた。封もしてないし、邪魔くせーなと想いつつ、中味を見た。個人名と会社名ばかり、おまけに私が見た事の無い様な、数字が並んでいた。時間です良かったら、仕事は終わりになります、このまま家に帰ります。一緒に私の家へ来てください、お見せしますよ」

次郎はマキに電話を入れた。

「所要が出来た学校が終わったら、先に漁港の民宿大漁丸に行ってくれ、そんなに時間は掛からんと思う。予約はしてある、先に気に入った焼酎でもやっつけてくれ」

と言って次郎はスマホを切った。

加奈子さんは次郎に見せた。

「ほれこれだよ」

見ていた次郎の形相が、秒刻みで変っていった。次郎の脇で見ていたケンジが言う。

「これを奴らに叩きつけてやりましょう」

「このままで通るのもありだが、往々にして詰めがな足りい。だけど小生等にとって、重要書類である事には変わらない。加奈子さんこれをコピーさせて下さい」

「そのまま、持って行っても構わないよ」

「そう言うけどこれは娘さんのです、預かっているだけです」

「そうかい、じゃーコピーとやらをお願いするかな、来た方向と逆にコンビニがあります」

ケンジが書類を持ってコンビニへ走った。

「でも、加奈子さんがお元気で、安心しました」

「娘の家出とぐうたら亭主、人と会ってもすれ違っても、視線を気になる様になってしまった。自然と誰とも話しなくなり、人目を避けるようになった。

そんな矢先、谷端次郎の名を耳にした。縋る思いと言うか、この人なら話が出来る、そんな思いでお会いした、想像していた通りの人でした」